

〔注意〕 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の「ぼく」（平山史彰）は、医師である父の転勤に一緒にいていくことにした。引越し先は千葉県銚子市の外川という漁師町。母と妹は東京に残り、全くなじみのない土地で父と「ぼく」の二人きりの生活が始まった。

クラスメイトの佐丸は「ぼく」に親しく話しかけ、銚子の町を案内してくれた。佐丸によると、銚子には源義経の愛犬「若丸」が海辺で吠え続けて岩になったという伝説があるそうだ。佐丸の飼い犬の「春」の散歩に付き合い、海辺で一緒にワンワンと声を張り上げていると、「ぼく」は胸にたまったもので吐き出せる気がするのだった。

佐丸のおかげで他のクラスメイトとも打ち解けるようになってきたある日、「ぼく」は同じクラスの上村亜美に呼び出された。上村は、「ぼく」の父が医療ミスをしたことによって銚子に転勤させられた、という噂が流れていると言つ。

「誰がそう言ってる？」

「え？」

「言えよ。誰がその、でたらめな噂を流している？」

ぼくの頭は真っ白になった。リセットボタンを押したように、「ごちゃごちゃ渦巻いていたものがすっと消える。

上村は掴んでいた手を離し、体を後ろに引いた。

「答えるつてば。おまえは誰からその噂を聞いたんだ。家の人？ 大人だって言ったな。そうなのか？」

「ちがう。なによ、でたらめつて」

「ミスを犯したのは別の医者だ。病院はそれを隠そうとした。お父さんは明らかにすべきだと意見して、病院の偉い人たちを怒らせ、ここに飛ばされたんだ。まだかよ。ここに来て、まだ悪く言われるのか。いいかげんにしろ」

口惜しさと憤りでぼくの頭は再びごちゃごちゃになった。恐くて震えるのではなく、①赤黒いものが体中を駆けめぐり、じつとしていられない。

「黙つてないで何か言え。噂を流しているのはおまえんちのお父さんか、お母さんか」

「悪くないなら、なんで外川に来たの。こんなド田舎。東京にいらなくなったら来たんでしょ」

正しいことをしても、それが認められなければ「正しい」にはならない。ここに来るまでの間にさんざん思いついた現実だ。ベテランの先生が当直を抜け出してどこかに行つてしまい、ひとりきりの研修医が急変した患者と運び込まれた急患にあたふたし、投薬ミスを犯した。これが事実なら、責められるべきははつきりしている。でも病院はすべてをうやむやにしようとした。

父は、医者の個人的なミスに白黒つけたかったわけじゃない。事実を重く受け止めつつ、事故の起きない体制作りに尽力すべきだと主張した。②A（ ）に余ることは今までに何度もあったらしい。見過ごすことがもうできなかったのだ。父だけでなく、声を上げた人は他にもいる。外科医がひとりと、看護師が三人、事務員がひとり。このうち内科医の父と外科医は飛ばされ、看護師のひとりとは退職した。他の人たちがどうなったのかはわからない。病院のその後も聞こえてこない。

父が自分の進退を賭けて起こした内部告発は、不運なことにはくらの家族全員を巻きこんだ。母方の祖父は製薬メーカーの重役だった。病院長と旧知の間柄であり、伯父も同様だ。父を説得するよう病院長直々に頼まれ、祖父は③ふたつ返事で引き受けた。説き伏せる自信があったのだろう。それまでは従順な婿だった。甘く見ていたところ、父はどんな説得にも応じなかった。脅されても屈しない。板挟みになった母が体調を崩し、家族を犠牲にするのかとなじられても曲げない。ぼくや妹や母を自宅の居間に集め、事の顛末を語ると同時に、一緒に銚子に行つてほしいと訴えた。

「悪いことはしてない。でも人を陥れるやつはいるんだ。くだらない噂話を流しているやつに、おれだって言いたことがある。お父さんだって黙つてない。誰だよ。教える」

「いろんな人よ」

「だから誰。言うまで帰さない」

ドアの前で足に力を入れて肩をそびやかすと、上村は顔を歪めてべそをかいだ。知らないとか、わからないとかごまかそうとするので、

〔注意〕 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

腹が立って今にも殴りそうになった。拳を握りしめると、上村は身をすくめ泣きわめくようにして言った。

「佐丸よ。佐丸のお母さん」

え？

「病院で働いているの。知らない？ 聞いてない？ 佐丸のお母さんがしゃべってたんだよ」

嘘だ。何それ。病院勤めっていうのも聞いてない。働いているのは知っていたけれど。

「佐丸んちはこちに引越してくる少し前に、お父さんが死んじゃったの。だから、お母さんも佐丸も、お父さんと一緒に引越してきた平山くんのことじゃあないんだよ。それで、わざと噂を流しているんだよ。ほんとうだよ」

まさか。④ 体中が冷たくなつてうまく動かない。握った拳が人の手みたいだ。

そのとき廊下に話し声がした。立ち尽くしている間にも近づいてきて、ドアからひよいと顔のぞく。宮本と川口だ。

「あ、平山。いたんだ。もう帰ったかと思った」

「よかった。今日の社会の宿題……」

言いかけて、ふたりはぼくと上村のただならぬ雰囲気（ふんいき）に気づいて息を飲んだ。

「どうかした？」

② B（ ）をひそめる宮本にぼくは尋ねた。

「佐丸のお母さんって、銚子さくら病院で働いてるの？」

「うん」

「お父さんはここに来る前に亡くなった？」

⑤ 宮本はぼくと上村の顔を見比べながらうなずいた。それ以上、訊けなかった。今にも佐丸が現れそうで、恐くてたまらない。上村の話が大嘘かもしれないのに、あのおばさんがまさかと思うのに、もしかしてという疑いがぼくのすべてを凍り付かせる。⑥ 足元に大きな穴が空いているようだ。じつと立っているつもりが、吸い込まれるように落ちていく。

気がついたら駆け出していた。廊下を走り、階段を下りて、靴を履き替え、学校から飛び出す。地面を蹴って蹴って蹴って、呼吸が間に合わず苦しい。心臓も肺も胃袋も吐き出してしまいたいそうさ。

外川の集落を抜け、電車の駅を通り越し、やみくもに進んでいると次の駅である大吠駅（おおいけえき）のホームが見えてきた。手前で曲がって海に向かう。家には帰れない。宮本や川口が訪ねてくるかもしれない。ぼくに真実を告げるかもしれない。

佐丸がほんとうはぼくを嫌っているっていうこと。ちつとも友だちじゃないこと。陥れようとしていること。

ちがうかもしれない。すべてが上村の嘘で、佐丸も佐丸のおばさんも、ぼくの思っている通りの人かもしれない。

⑦ どちらかだ。マルかバツか。右か左か。黒か白か。

コインを投げるように簡単。「かもしれない」がすべてなくなる。裏か表か、答えはひとつ。すぐに決着がつく。

ぼくはそれを知りたくなかった。佐丸の本心を知りたくない。決着なんかいらない。

黙々と足を動かしていると横風が強くなる。マリンパークの前を行きすぎると白い灯台が見えてくる。ここも佐丸と一緒にいった。佐丸はやつとの想い出（おもいで）だらけだ。逃げたくても逃げられない。想い出が追いかけてくる。ぼくを絡め取ろうとする。

初めて登った「地球の丸く見える丘展望館」から眺めた海が、一足ごとに近くなる。灯台のまわりはがらんとしている。誰かにすぐみつきりそうで、岩場に巡らされた遊歩道へと下りることになった。急な階段をたどっていると波音が大きくなる。⑧ 西の空に雲が広がり、夕陽はほとんど隠れてしまった。あたりに人影はなく、暗くて寒い。

ちようどよかった。ぼくは誰にも気づかれそうもない岩場の窪み（くぼみ）をみつけ、遊歩道から離れたそこに身を寄せた。しゃがんで膝を抱え、背中を丸めて目をつぶる。やつと息がつける。震えが治まりそうさ。逃げられる気がした。このままじつとしていよう。してるから、

⑨ いっそ岩にしていほしい。義経を思いながら鳴き続け、岩になった若丸のように。

どれくらいそうしていただろうか。指先が痛いほど冷えたところで、上着のポケットの振動に気づいた。携帯電話が鳴っていた。取り出してもたもたしている間に止まってしまふ。父からだった。何かあったのだろうか。客体が急変した患者さんがいたのか。夕飯までに間に合わないという連絡か。

デイスブレイをみつめているとまたかかってきた。

「もしもし」

「フミか。フミなんだな。今、どこにいる？」

なんだろう。すぐくあわてている。

「どうかした？」

「どうかしたじゃない。心配したぞ。今、どこにいる？ お父さん、すぐに行くから。今いるところを言いなさい」

学校から連絡が行ったのか。宮本や川口の顔が浮かんだ。

「もしもし、フミ、聞こえるか？」

「お父さん、ぼく、友だちのことが信じられないよ。すぐ大きいじで、すごく大切な友だちなのに、信じることができないんだ」
少し間を置いてから返事があった。

「それは、とても大切だからだよ。なくしたくない気持ちが強すぎて、恐くなるんだ。お父さんもこの一年、ずっとそうだった」
「うん」

他の誰でもない、お父さんの言葉だからうなずけた。病院に意見書を提出すると決めてから、まわりの人たちの多くは変わってしまったのだらう。仲がいいと思っていた人にも、心ない態度を取られた。

「でもな、自分は自分で精一杯、誠実にやっていくしかないんだ。フミもだぞ。おまえが優しさや思いやりを持っていれば、必ず気づいてくれる人がいる。応えてくれる人がいる。それは信じていいぞ。お父さんが言うんだからな、まちがいない。大丈夫だ。恐くない。恐くても、投げ出すな。お父さんも投げ出さない。おまえも投げ出すな」

初めての引越して、初めてできた友だち。今、一番大事な友だち。信じると、父は言わなかった。人の気持ちは人の気持ちだ。自分ではどうにもならない。自分自身の気持ちをなんとかするしかない。

少しでも、誠実に。思いやりを忘れずに。

ぼくにとつての佐丸ではなく、佐丸にとつてのぼくは、どんなクラスメイトだっただろう。

あいつのお父さんが銚子に引越す前に亡くなったことは知らなかった。春をけしかけ、若丸のまねをして、海に向かってワンワンと吠えたとき、あいつはお父さんを思い出していたのだろうか。自分を置いて逝ってしまった父親のことを。

⑩波の音がふつと静まった。傾いた半月が海原の上に浮かんでいる。

犬の鳴き声がした。

手足に力を入れ、窪みから体を起こす。耳を澄ます。寄せては返す潮騒の中に、かすかに混じる、聞き覚えのある鳴き声。

「春」という名前の由来を尋ねたとき、お父さんがつけたと佐丸は言っていた。秋生まれの子犬だったのに、「春」。半年後の春から、銚子での新しい暮らしが始まるとわかっていなかったから。

でもその春に、お父さんはもういなかった。

ぼくは岩場から這い出し、立ち上がった。よろよろと歩き出す。

犬の鳴き声が聞こえたよ。だよな、だってここは。犬吠埼。

⑪白い灯台の前で、佐丸と声を合わせられたらいいなと思う。一緒に笑えたらもつといいなと思う。そうなるような人間を、ぼくはめざさなきゃいけないんだ。

後日、佐丸は自分の家族についてこう語った。

「おれの親父も、よしやいいの上司に噛みついて、窓際に追いやられて会社を辞めたんだ。母ちゃんは平山のお父さんの噂話を病院で聞いて、似ていると笑ってた。そして、あんたと同じ年の男の子がいるらしい、もしも転校してきたら仲良くしてあげなさいって」

その通りに、かまってくれたわけだ。佐丸のお父さんは心筋梗塞で倒れ、そのまま亡くなってしまったという。会社を辞めるにあたり、仕事の整理その他いろいろあって、心身ともに無理が重なったのかもしれない。

ぼくの父の左遷の理由、それが医療ミスによるという噂話は、入院中のおばあさんから聞きかじったゴシップを、上村がわざわざぼく

〔注意〕答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

に聞かせただけだった。宮本に言わせると、「平山の気が引きたかつたんだよ」だって。冗談じゃない。

(大崎梢『よつつ屋根の下』)

注1 頓末：初めから終わりまでの事情。

注2 左遷：それまでよりも低い地位におとすこと。

注3 ゴシップ：面白半分の噂話。

問1 傍線①「赤黒いものが体中を駆けめぐり、じっとしていられない」とあるが、このときの「ぼく」の気持ちを自分の言葉で説明しなさい。

問2 傍線②A「()に余る」、②B「()をひそめる」の空欄に入る言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 口 イ 目 ウ 耳 エ 胸 オ 肩 カ 手 キ 眉

問3 傍線③「ふたつ返事」の意味を次から選び、記号で答えなさい。

A すぐに気持ちよく引き受けること イ 迷って二回返事をする事 ウ 本心とは違う返事をする事

E ふたつの選択肢を答えること オ 自信満々で引き受けること

問4 傍線④「体中が冷たくなってうまく動かない。握った拳が人の手みたいだ」とあるが、「ぼく」がこのように感じたのはなぜか、説明しなさい。

問5 傍線⑤「宮本はぼくと上村の顔を見比べながらうなずいた」とあるが、このときの宮本の気持ちを説明しなさい。

問6 傍線⑥「足元に大きな穴が空いているようだ。じっと立っているつもりが、吸い込まれるように落ちていく」とあるが、これは「ぼく」のどのような気持ちを表しているか、説明しなさい。

問7 傍線⑦「どちらかだ。マルかバツか。右か左か。黒か白か。／＼コインを投げるように簡単。『かもしれない』がすべてなくなる。裏か表か、答えはひとつ」とあるが、この部分について次の1、2の問いに答えなさい。

1、「どちらかだ」の「どちら」とは何と何を指すか、説明しなさい。

2、「マルかバツか」「右か左か」「黒か白か」「裏か表か」と、何度も繰り返すことから、「ぼく」のどのような気持ちがわかるか、説明しなさい。

問8 傍線⑧「西の空に雲が広がり、夕陽はほとんど隠れてしまった。あたりに人影はなく、暗くて寒い」とあるが、ここで作者は「ぼく」のどのような気持ちを表現しようとしているか、説明しなさい。

問9 傍線⑨「いつそ岩にしてほしい」とあるが、「ぼく」がそのように思うのはなぜか、説明しなさい。

問10 傍線⑩「波の音がふつと静まった。傾いた半月が海原の上に浮かんでいる」とあるが、ここで作者はどのようなことを表現しようとしているか、説明しなさい。

問11 傍線⑪「白い灯台の前で、佐丸と声を合わせられたらいいなと思う。一緒に笑えたらもつといいなと思う。そうなれるような人間を、ぼくはめざさなさいけないんだ」とあるが、この部分について、次の1、2の問いに答えなさい。

1、「そうなれるような人間」とはどのような人間か、説明しなさい。

2、「ぼく」が「そうなれるような人間」を「めざさなさいけないんだ」と思うようになったのはなぜか、文章の流れを踏まえてわかりやすく説明しなさい。

〔三〕 次の傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- | | | | |
|----------------|----------------|---------------|----------------|
| ① 危険をサツチする。 | ② カクダンに進歩する。 | ③ カイキヨを成しとげる。 | ④ 学校のエンカクを調べる。 |
| ⑤ モゾウシに書く。 | ⑥ アサましい考え方をする。 | ⑦ 馬車に乗ったキフジン。 | ⑧ 無病ソクサイを願う。 |
| ⑨ ジュクレンの技を伝える。 | ⑩ ガイロジュを植える。 | ⑪ アヤマリを正す。 | ⑫ エキシヤに占つてもらう。 |
| ⑬ 本物を見ぬくガンリキ。 | ⑭ ガクメン通りに受け取る。 | ⑮ 別の問題がハセイする。 | ⑯ 運命に身を委ねる。 |
| ⑰ 友人と意見を異にする。 | ⑱ 我先に逃げ出す。 | ⑲ 重宝する道具。 | ⑳ 見目うるわしい人。 |

